

# 翻訳者に求められる能力—翻訳英日文法—



## ●プロフィール

柴田裕之（しばた・やすし）  
 翻訳者。おもな訳書『叛逆としての科学』『眠れない一族』『赤を見る』『神々の沈黙』『ユーザーリビュージョン』『東西逆転』『ヨーロッパ・ドリーム』『水素エコノミー』『禁断の知識』  
 米国バベル翻訳大学院教授

## はじめに

翻訳者に求められる能力と言われて、まず頭に浮かぶのが語学力でしょう。英語を日本語に訳すのであれば、英語の文章が読めなくては話になりません。そして、納品するときは当然、日本語ですから、日本語の文章がきちんと書けることも必須です。

ところが、外国語をきれいな日本語にしようとすると、これが意外にむずかしいものです。日本人だからといって、誰もが上手な日本語を書けるとはかぎりませんが、ふだんは端正な日本語の文章が書ける人であっても、翻訳となると、とたんに調子が狂ってしまうことがよくあります。それはなぜでしょう？

じつは、英語と日本語では、構文や発想などに根本的な違いがあるため、たんに言葉を英語から日本語に置き換えるだけでは、無理が生じてしまうのです。あるいは、原文が頭から離れないために、英語の構文や発想に引きずられて、いつもなら書かないような、変な日本語を書いてしまうのです。

こうした事態を避けるために、Language Competence の領域で英語と日本語の力に加えて不可欠なのが、転換能力であり、その能力を身に

つけるためのポイントを体系的にまとめたのが、翻訳英日文法なのです。

それでは、論より証拠。実際に例を挙げながらご説明しましょう。

## 実 例解説・演習

### 1 代名詞の処理

原文 1 My name is S. I am from Japan and I have been here for three years.

訳文 1 私の名前は S です。私は日本の出身で、私はここに来て 3 年になります。

原文 1 を訳文 1 のように訳したとします。訳文の語句は原文の語句ときちんと対応していますし、意味の取り違えもありません。それでも、訳文に少しばかり不自然さを感じないでしょうか。もし原文がなく、自発的に自己紹介をしていたとしたら、みなさんは訳文 1 のように言うでしょうか。たぶん、言わないでしょう。人称代名詞「私」の連発が耳ざわりですから。

命令文を除くほとんどの英文には主語があります。そして、同じ名詞に関しての記述では、二回目以降、代名詞を使います。一方、日本語では主語はしょっちゅう省きます。自分や相手を指したり、前に出た人を受けたりする人称代名詞が出てくる割合は、英語に比べてぐっと低くなります。人称代名詞は、少ないほうがすっきりします。それに日本語は、敬語もありますし、伝統的に男女や年齢による言葉遣いの違いも英語よりはっきりしているのです。省いても誤解を招きにくいものです。原文 1 を訳すとき、思いきって代名詞を省いたのが、訳文 1' です。

訳文1' Sと申します。日本の出身で、ここに  
来て3年になります。

これで意味はじゅうぶん通じます。主語にかぎ  
らず、意味がきちんと通じる範囲で人称代名詞を  
省くというのが、翻訳英日文法のポイントのひと  
つです。

それでは、このポイントを頭に置いて、みなさ  
んも試しに以下の原文を訳してみてください。

原文2 Even driving his car as hard as he  
could through the torrential rain, Meyer  
did not get to London before dark.

ヒント 前半は分詞構文です。譲歩や逆接の関係  
で後半とつなげるとよいでしょう。

torrential = 土砂降りの Meyer = マイ  
ヤー（名字あるいは男性の名前） get  
to... = ~に着く before dark = 日暮れ  
前に

原文2を文字どおり訳すと、たとえば次のよう  
になります。

訳文2 土砂降りの中を彼は彼の車をできるだけ  
激しく運転したにもかかわらず、マイ  
ヤーは日暮れ前にはロンドンには着かなか  
った。

「彼は彼の」の部分がいかにも不自然ですね。  
ここで、代名詞を省くというポイントを応用すれ  
ば、次のようになります。

訳文2' 土砂降りの中を必死で車を飛ばしたが、  
マイヤーがロンドンに着いたときには日  
が暮れていた。

もう一点、補足しておきましょう。英語では分  
詞構文や従属節で始まる文は、その始まる部分  
では代名詞を使い、そのあとにその代名詞のも  
となった名詞を使うというルールがあります。原  
文2は分詞構文で始まっていますから、そこに出  
てくる"his"や"he"は、そのあとに出てくる  
"Meyer"を指している代名詞です。それを理解せ  
ずに訳すと、「彼」と「マイヤー」が別人と誤解  
されかねません。

訳文2'では「彼」を省略したので、そのよう  
な誤解は避けられました。代名詞を省けないとき

は、最初にもとの名詞を、そのあとに代名詞を使  
えば、やはり誤解は避けられます。

原文3 I'm a European, my husband is a  
European, I have an Italian passport in  
my purse, and my children are  
European.

ヒント European = ヨーロッパ人 purse = ハ  
ンドバッグ、財布

これも、あえてそのまま訳すと、次のようにな  
ります。

訳文3 私はヨーロッパ人で、私の夫はヨーロッ  
パ人で、私は私のハンドバッグ中にイタ  
リアのパスポートをもっており、私の子  
どもたちもヨーロッパ人です。

代名詞を省くという翻訳英日文法のポイント  
を踏まえて、転換の能力を発揮すれば、訳文3'  
のような文に行きつきます。

訳文3' 私はヨーロッパの人間で、夫もそう。ハ  
ンドバッグの中のパスポートもイタリア  
のもので、子どもたちもヨーロッパ人  
です。

## 2 訳す順番

原文1 She gave the witch a push that sent her  
into the water.

訳文1 彼女は彼女を水の中に送りこんだひと押  
しを魔女に見舞った。

訳文1は、明らかに日本語としておかしいですね。  
二度目に出てくる「彼女」が「魔女」を指している  
ことがわからないのはもとよりですが、「彼女を水  
の中に送り込んだひと押し」というところが、いか  
にも不自然です。その不自然さの根本には、英語  
と日本語の語順の違いがあります。

ふつう英語の文では主語と動詞が先にきて、目  
的語や補語、関係詞節などがあとに続きます。一方、  
日本語では主語が最初に、述語が最後にきます。  
そのため、あくまでこの形にこだわると、訳文の主  
語と述語が離れすぎたり、原文の流れが乱れて不  
自然になったりしかねません。

そこで、頭から訳すという技法が有効になってき  
ます。たとえば、主語、動詞などのあとに関係詞節

がある場合は、主語＋関係詞節＋動詞の順ではなく、原文どおり主語＋動詞＋関係詞節の順で訳すわけです。それを実践したのが訳文1'です。

**訳文1'** 彼女がひと押しすると、魔女は水に落ちた。

訳文1と比べれば、優劣は自ずと明らかでしょう。それでは、みなさんも以下の原文を訳してみてください。

**原文2** He had a small boy's curiosity which drew me to him.

ヒント curiosity = 好奇心 drew = draw (引きつける) の過去形

**訳文2** 彼は私を彼に引きつけた幼い子どものような好奇心をもっていた。

やはり不自然さはいなめませんから、関係代名詞節を後回しにすると、訳文2'のようになります。もちろん、代名詞はなるべく省いてあります。

**訳文2'** 彼には幼い子どものような好奇心があったので、私はそこに引きつけられた。

**原文3** She smiled momentarily before turning her attention back to *The Times* crossword puzzle.

ヒント 「～する前に」を「～してから」と発想転換します。

momentarily = 一瞬、ちょっとのあいだ  
turning = turn (向ける) の現在分詞形  
attention = 注意 *The Times* = 「タイムズ」紙

**訳文3** 彼女はまた「タイムズ」紙のクロスワードパズルに注意を向ける前に一瞬ほほえんだ。

訳文3のように訳してもあながち間違いではありませんが、原文の順を生かすと、次のようにも訳せます。

**訳文3'** 彼女は一瞬ほほえんでから、また「タイムズ」紙のクロスワードパズルに注意を向けた。

### 3 名詞の処理

**原文1** She was a heavy sleeper.

**訳文1** 彼女は深い眠り人だった。

原文と訳文を比べてみると、すべてきちんと

対応しているように見えますが、この訳はなんとも珍妙な日本語ですね。英語では名詞を使っても、日本語ではほかの品詞に変えたほうが自然である、典型的な例です。"sleeper"のように動作者を表す名詞を含む原文には、その名詞を動詞に、それを修飾する形容詞は副詞表現に変えるという手が使えます。

**訳文1'** 彼女はいつもぐっすり眠っていた。

次のふたつの例で、この翻訳英日文法の手を使ってください。

**原文2** After Hector's death, James became a frequent visitor.

ヒント frequent = 頻繁な visitor = 訪問者

**訳文2** ヘクターの死後、ジェームズは頻繁な訪問者になった。

「頻繁な訪問者」というのは、日本語としては苦しいですね。この部分、「訪問者」を動詞に、「頻繁な」を副詞表現に、というふう一品詞を変えます。

**訳文2'** ヘクターが死んでから、ジェームズは頻繁にそこを訪ねるようになった。

**原文3** He is a great believer in good luck.

ヒント believer = 信者、信じる人 good luck = 幸運

**訳文3** 彼は幸運の強い信者だ。

意味はわかりますが、ふつう、「幸運の強い信者」とは言わないでしょう。やはり品詞を変えて、たとえば次のように訳せます。

**訳文3'** 彼は、幸運はかならず巡ってくると固く信じている。

### 4 時制の処理

**原文1** He knew that I was hungry.

**訳文1** 彼は私が空腹だったのを知っていた。

これまた原文と訳文がすべてきちんと対応しているように見えますが、訳文はやや曖昧な感じがしませんか。原文では"knew"と"was hungry"が同じ時点なのは明確なのですが、訳文では「私が空腹だった」のが「彼が知っていた」時点と同じなのか、それ以前なのか、釈然としないからです。これは、英語と日本語では「時の一致」に関

するシステムが違うからです。この問題は、次のように訳すと解消できます。

**訳文1'** 彼は私が空腹なのを知っていた。

これならば、「私が空腹」だった時点と「彼が知っていた」時点が同じことがわかります。日本語では、主節の述語（「知っていた」）が全体の時制を表し、従属節の述語（「空腹なの」）が現在形であれば、主節の述語の時制と同じ時点を表しているとして解釈されます。そこを原文に引きずられて従属節の述語まで過去形にしてしまうと、従属節の中身が、主節より前のことのような印象を与えてしまいます。

それでは、みなさんも試してみてください。

**原文2** He assured that that detective could solve anything.

ヒント assured = assure（断言する、保証する）の過去形  
detective = 探偵、刑事  
solve = 解決する、解明する

**訳文2** 彼はあの探偵は何でも解決できたと請けあった。

このままだと、「解決した」のは「請けあう」以前のことのようにですね。そこで従属節の動詞の時制を変えて訳します。

**訳文2'** 彼はあの探偵なら何でも解決できると請けあった。

**原文3** I said a prayer for my niece because I knew it was her hardest challenge.

ヒント prayer = 祈り（say a prayerで「祈る」）  
niece = 姪（めい） hardest = hard（困難な）の最上級  
challenge = 課題、難題

**訳文3** 私はそれが彼女にとって最高の難題だったのを知っていたから、私は姪のために祈った。

これも従属節に出てくる "it was" の部分の時制を工夫します。

**訳文3'** 私は姪のために祈った。彼女にとって最高の難題だと知っていたからだ。

## まとめ

いかがでしたか？ 英語から日本語に翻訳するにあたって、構文や発想を転換する能力が必要であることが、おわかりいただけたでしょうか。そしてまた、翻訳英日文法とはどういうものか、感じがつかめたでしょうか。

ちなみに、翻訳英日文法には、先に取り上げたポイントのほかに、「無生物主語の処理」「関係代名詞の処理」「形容詞の処理」「副詞の処理」「比較表現の処理」「受動態の処理」「仮定法の処理」「話法の活用」「強調・省略構文の処理」「特殊な接続詞の処理」といったポイントがあります。

もちろん、翻訳英日文法は、すべてをカバーしているわけではありませんし、何から何まで整然と合理的に説明できるわけでもありません。なにせ、相手は言語です。言語自体、矛盾や例外や不合理な要素を多分に含んでいるのですから。

それでも、やみくもに試行錯誤を繰り返すよりは、大まかなものであっても、体系化された規則を学んだほうが、効率が良いことは明らかです。初心者にとってはなおさらそうでしょう。

私自身、翻訳の勉強を始めたときに、まず読んだ本の一冊が、翻訳英日文法の参考書でしたし、以来、長年出版翻訳の仕事をしていて翻訳英日文法によって培われる転換能力を使わない日は一日としてありません。翻訳英日文法は、それほど基本的であり、しかも、応用価値が高いものなのです。翻訳英日文法を学んで得られる転換の能力は、まさに Language Competence にとって不可欠の要素と言えるでしょう。